Waku Waku エッセイ

えんげきメガネで世界を見たら

野々下　孝

文化とは、我々と共に、いつの間にか存在し、住民の皆さんの日々の営みの中に自然とあるものだと思います。

私がそう考えるようになったのは、活動の拠点を仙台市に移した２０１０年からです。２００９年までは、東京の劇団に所属し、俳優として活動していました。「新しい演劇」を探求しつつ、１日中稽古場で、実験と発表を繰り返し、実験結果である公演の創作に没頭していました。古今東西の戯曲を貪るように読み、演劇史や上演史を調べ、理解に一定の教養を要する、ハイアートを世の中に発表していました。我々の作品は２０００人程度のお客様に受容され、「コアな演劇界」を作り出し、演劇史の最先端を走りながら、日本から飛び出し、ドイツ、ルーマニア、ポーランドなどでも発表する機会を得て、世界基準で演劇について考えていました。生活は演劇一色、全てが演劇を中心に回っていました。そして２００９年、私は拠点を仙台に移します。そこには私がどっぷり使っていた「コアな演劇界」や「世界基準の演劇」は見当たりませんでした。

しかし、「人間らしい生活」がありました。ご飯を美味しいと感じ、景色を美しいと感じる日常が戻ってきました。そして日常と隔たっていた「演劇」が、日常に解き放たれたように感じられました。妻と話すときにコミュニケーションを、家から買い物に行く時間に、自分の歩き方を楽しめるようになりました。「えんげきメガネ」をかけることで、毎日同じことの繰り返しに感じる「日常」も、私にとっては「演劇」だと思えたのです。

演劇とは「異なる性質を尊重し、受容することで、新たな価値を創造し、予想できない未来の変化に対応していく」こと、つまり「生活」そのものだと思います。

今私は、月に2回、隔週の土曜日に、フレンドリープラザで朗読倶楽部「星座」と一般公募の皆さんと一緒に作品を創っています。皆さんのことを「えんげきメガネ」でよーく見ながら、一緒に演劇で遊んでいます。違いを楽しむことができる演劇は、小学生からシニアまでの幅広い年齢層の皆さんが一緒に遊ぶのに、とても適しているのです。小学生の少女に読めない漢字があれば、中学生が教えてあげたり、シニアの方が自由に休憩を取っているそばで、40代チームは延々と話し合いと稽古を続けていたりする。それが演劇であり、この土地で、人が、今を、プレイする、ということだと思います。

新型コロナウイルスによって、舞台芸術が壊滅的な打撃を受けている現状ですが、様々なことに配慮しながらも、プレイし続けたいと思います。それこそが、ギリシャ悲劇や、シェイクスピアの時代から続いた、人類の知恵なのですから。

野々下　孝（ののした・たかし）

仙台シアターラボ代表・俳優・演出家

大分県佐伯市出身。仙台シアターラボ代表・俳優・演出家。大学卒業後、劇団山の手事情社に入団。東西の古典作品を世界各地で上演。2009 年に拠点を仙台に移し、2010 年に仙台シアターラボを設立。シーンを、抽象的な関連性によって連鎖させ、ある印象を作りだすスタイルは、「演劇の暴走」と称される。

2016 年より ARCT 代表。平成 25 年度宮城県芸術選奨新人賞受賞。演劇を抽象化する作業と身体能力には定評がある。

2018 年 9 月から川西町フレンドリープラザ附属演劇学校 朗読倶楽部「星座」顧問。

五月生まれの姉妹について

高瀬　葉月

私が唯一、全身全霊で愛せる存在。何処に居ても何をしていても気になってしまう存在。どんなに冷たくされても隣に居たい存在。我が家の猫、皐月とメイのことである。天真爛漫でスーパーキュートな皐月と、知的でクールビューティーなメイ。信じられないくらい可愛い。障子を破かれても、柱で爪研ぎをされても、マーキングをされても許してしまう。たまに腕を引っ掻かれても「愛の印だね」と抱きしめてしまう。相手が人間だったら完全にアウトである。

猫に翻弄されているのは私だけではない。皐月と相思相愛の兄は帰省する度に「誰か俺を猫にしてくれ、そしたら皐月ちゃんと結婚する」と叫んでいるし、ズボラな母も猫のトイレ掃除だけは欠かさない。人に振り回されるのは御免だが、猫に振り回されるのは楽しいと思えてしまう。不思議な生き物である。

いつか当たり前に訪れる別れの時、私はその事実を乗り越えられるのだろうか。想像するだけで視界が歪んでしまう。しかしどんなに強い悲しみの雨に打たれても、皐月とメイとの出逢いを後悔することは決してないだろう。私達の元から離れるその瞬間まで、精一杯愛することをここに誓う。さっちゃん、メイちゃん、大好きだよ。どうか長生きしてね。（川西町）

上方落語もよろしく

水野　喜之

去年ご縁があって川西町フレンドリープラザでの春風亭一之輔さんの公演を聴きに伺った。やはり予想を裏切らない面白さで大いに堪能したのだが、まあ私はそれ程の落語好きなのだ。今は個性的で面白い噺家がたくさんいて全く聴き飽きない。ここからは敬称略を許してもらうが、贔屓にしているのは一之輔の他、権太楼、白酒、萬橘、宮治、渋いところでは小三治、雲助、龍志、一朝、扇辰と枚挙に暇がない。思い起こせば中学生の頃から落語を聴き出していた。おそらく最初に見聞きしたのは上方落語四天王のひとり桂米朝だ。そう、実は私は大阪生まれなのだ。子供の頃から当然の様に吉本新喜劇や漫才を浴びるように聴いてきたが元々寺社仏閣が好きという妙な子供だったので（中学でひとり京都のお寺巡りをしていました。）昔を語る落語が好きになるのは至極当然のように思われる。今でも上方落語は大好きで東京でもよく聴く。ところで置賜地方では上方落語の公演もやっているのだろうか？

東京の落語でいまや当たり前の出囃子やめくり（名ビラ）、色とりどりの羽織などは全て上方落語から来ているし多くの落語（たとえば寿限無・牛ほめ・子ほめ・時そば・らくだ・青菜・饅頭こわい・粗忽の釘・長屋の花見等々）が実は上方落語から来ているのだ。一度上方落語も聴いてもらいたいな。まずは米朝落語をＹｏｕＴｕｂｅでどうぞ。（東京都）